

に因りてなり。

坎巨地王子の來訪

一日坎巨地カンヂユット（フンザ河上流域よりパミール）王の息來訪す。眉目秀麗、年齒二十五六の少年にして、其談に依れば、

坎巨地は古來清國の附庸國にして、國王は代々清廷に朝貢す。然るに今を距る十三年前、印度政廳は郵便線路保護の名の下に、武官を駐め軍兵を屯し、妄りに國政に干涉せし故に彼の父王（當時庫車に在り郡王啣を有す）は之を厭ひ、事の顛末を新疆巡撫に告ぐる爲め、去て烏魯木齊に到りしが、巡撫の抑留する所と爲り目下は庫車に在りて歸國を許されず。最初は地方官より相當の俸祿を給與せしも、次第に減少して、近時は僅に口を糊するの情態なり。又彼は莎車知府より毎月單に銀三兩を受くるのみにて、衣食の料に缺乏しつゝ在り。且つ彼が父王の國を去るや、印度政廳は直ちに王の異母弟を立て、王と爲す。元來現王は、妾腹の出にして、國法上王たるの資格なき者なれば、彼れ歸國せば、當然王位に即ぐを得べきものと確信し、彼が幼時に於ける殿中の榮華を追懷して、現時の悲境を嗟歎しつゝ、我日本の助言に依り、清廷の一顧を促がし、印度政廳に交渉して、彼れ